

令和元年6月3日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03371

研究課題名(和文) 『慕帰絵』の制作事情をめぐる総合的研究 覚如像の構築方法と建築表現に注目して

研究課題名(英文) "Representations of 'Otani' in the Illustrated Biography of Priest Kakunyo (Boki-e): The People and Religious Spaces of Early Period Hongwanji

研究代表者

池田 忍 (Ikeda, Shinobu)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：90272286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、本願寺第三世・覚如(1270-1351)の伝記絵巻である『慕帰絵』を対象とし、覚如ゆかりの「人」と「場」の描写の検討を通じ、その制作目的の解明を試みた。主たる考察方法と結果は、以下の二点である。

第一に、同時期に制作された『最須敬重絵詞』に注目し、『慕帰絵』との詳細な比較を試みた。第二に、京都・東山の大谷坊、覚如の隠居所や歌会開催の場、訪問先等の建築と空間の描写を、同時代における京都の都市景観と建築の実態と照らし合わせて検討した。その結果『慕帰絵』は、同時代の京都・東山の宗教空間において、覚如の後継者が、周囲から承される「本願寺」像の創出を試みた作品であるとの仮説に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、制作年代と二名の絵師の分担が判明する中世絵画の基準作で、建築・生活を詳細に描くことから絵画史料として重用されながらも、史料批判が十分に行なわれてこなかった『慕帰絵』を取り上げ、美術史・建築史研究者の共働を通じて、表現の特徴と意図の総合的な解明を試みた。

絵画表現と同時代の都市空間や建築の実態、史実とを照合し、注文主の意図に基づく作為を抽出する分析方法を吟味・追求した本研究は、『慕帰絵』一個の特徴を明らかにするにとどまらず、絵画(イメージ)の社会的機能に関する考察に寄与するという点からも汎用性の高い議論を提示した。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on Boki-e, a mid-14th century pictorial biography of the monk Kakunyo, the third abbot of Nishi Honganji. Through an analysis of how the people and places in Kakunyo's life were depicted, the goal was to elucidate why the scrolls were made. First, we did a close comparative analysis of the Boki-e text with Saishu kyojyu ekotoba, a contemporary biography of Kakunyo composed by his disciple. Second, we examined the portrayal in Boki-e of key architectural spaces associated with Kakunyo, such as the settings for the poetry gatherings he hosted, his private retreats, or Otani Mausoleum in Kyoto's Higashiyama district. We found that the Boki-e scrolls made use of textual and visual images that would have been familiar to Honganji adherents and other Kyoto residents of the day, creating a persuasive reality of sacred space that would foster their acceptance of Kakunyo and his successors as legitimate spiritual leaders in the Kyoto cultural milieu.

研究分野：美術史

キーワード：日本・東洋美術史 絵巻 建築史 日本史 日本文学 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

全10巻からなる『慕帰絵』(本願寺蔵)は、1巻の序文によって、覚如が没した観応2年(1351)末頃には完成したこと、後に足利將軍家に借り出されていた間に1・7巻が紛失し、文明14年(1482)に補作されたことなどが判明し、制作年代や伝来過程を窺い得る中世絵画の基準作として知られる。『新修日本絵巻全集』20(角川書店,1976)、『続日本絵巻大成』4(中央公論社,1985)、真保亨編『日本の美術 187 慕帰絵詞』(至文堂,1981)には、図版と共に美術史・宗教史・建築史の研究者による論考がおさめられ、近年の展覧会(『西本願寺展』(東京国立博物館,2003)、『極楽へのいざない』(龍谷ミュージアム・岡山県立美術館,2013)、『真宗の美』(福井県立美術館,2014))等にもその一部が出品、カタログには解説が執筆されてきた。しかし、「本願寺の創立者覚如の宗教的事績を述べる祖師の伝記ではなく、慈俊(次男從覚)にとって父である覚如の行歴を語るもの」で、「いわゆる祖師伝絵巻と趣を異にする」『絵巻物総覧』(吉田友之,角川書店,1995)との理解が定説化し、研究の進展はほとんどみられない。

ただし松原茂氏は、「慕帰絵と筆者たち」(『西本願寺展』,2003)において、多くの先行研究同様「覚如の歌人としての風雅な行状が描かれる」点に注目しつつも、詞書に記される覚如の臨終前後の出来事や和歌の内容に注目し、覚如 從覚 善如という血脈の相承がそこに象徴的に表されていると述べる。特に覚如が、長男の存覚をはずし、次男從覚の子光養丸(善如)に本願寺の留守職を譲ったという史実に照らし、和歌にことよせた、從覚による正統性の暗示・主張を読みとっている。また近年、佐々木隆浩氏は、引退後の覚如を描く最初の段となる『慕帰絵』5巻3段に注目し、詞書や絵に加え、同時代の和歌史に関する知見を駆使して歌人としての覚如像を鮮明にし、さらにはこの絵巻が覚如の歌集としての性格を有すると指摘した。さらに石井悠加氏は、隠居後の覚如の事跡を描く後半の巻・段の画中に、覚如の傍らに、孫=從覚の次子である善如(光養丸)がそれとわかるように描かれていることに注目し、絵の表現にも踏み込んで、贈答歌等の分析と併せて考察する。また『慕帰絵』を制作した從覚らの目的は、個人追慕の念に加え、善如が覚如の地位を継承することの正統性を明らかにすることであったとの見解を示す。興味深い近年の研究ではあるが、いずれも後半の巻を中心に取り上げている。

ところで、覚如の伝記絵巻は、同時代に異なる企画があったことは夙に知られている。すなわち『慕帰絵』制作翌年の文和元年(1352)門弟の乗専が撰述した『最須敬重絵詞』(7巻28段からなるが、絵巻制作が実現したか否かは不明。室町時代の写本が龍谷大学・大谷大学・常楽寺に分蔵)および絵師への構図の指示を記す「指図書」(西本願寺蔵、原本は現存せず)の存在である。しかしながら先行研究では、『慕帰絵』と『最須敬重絵詞』の詳細な比較検討、ことに重複する事跡を描く段について、「指図書」から推測しうる両者の相違点の分析、および異なる二つの絵巻が企画された事情の解明はなされてこなかった。また、建築学上、『慕帰絵』は絵画史料として不可欠な存在とされてきたが、史料批判がほとんど行われておらず、同時代の事実に基づく描写として扱われてきた。しかし、物語の脈絡と無関係に一場面のみ抽出して語ることは危険であり、各場面が、何を表現するために描かれ、その意図を強調するためにどんな作意が加えられたのかを判断した上で史料とする必要があると考えた。

2. 研究の目的

『慕帰絵』は、制作年代、および2名の絵師の分担が判明する中世絵画の基準作である。しかし、覚如の宗教的事跡を主眼とせず、歌人としての風雅な行状を熱心に描く点が「特異」との指摘が従来繰り返されるにとどまり、その理由の考察は不十分であった。また建築・生活を詳細に描くことから絵画史料として重用されるが、史料批判は行われていない。そこで本研究では、美術史・建築史研究者の共働により、詞書や史実、別様の覚如伝である『最須敬重絵詞』、同時期に制作された親鸞伝絵や肖像画などと照合しつつ、全段の描写を解読する。その上で、他の中世絵巻に描かれた僧と寺院の描写との比較を行ない、『慕帰絵』の作為と表現操作を明らかにして制作事情に迫り、絵画史上の位置を再考することを本研究の目的と定めた。

3. 研究の方法

本研究において最も重視した分析方法は、『慕帰絵』の「絵」と詞書、関連史料との照合である。これによって、各段に描かれた建築・都市空間、及び人物等を比定し、描写の意味の解読を試みた。

具体的には、以下の～の方法を用いた。

『最須敬重絵詞』および「指図書」の記述を分析し、選択場面等を『慕帰絵』と比較した。

本願寺関連史料により覚如の事蹟と両絵巻の制作背景を正確に把握し、『慕帰絵』の詞書・描写と合わせて分析した。

同じ建築・用途・行事の場面を相互比較し、建築の形態・用法の規範性を検討する。

高僧の事蹟や寺院生活を描く他の中世絵巻の分析は、既に過去の共同研究において進めてきたが、その成果を踏まえ、建築史と美術史の研究手法のメリットを生かしながら、分析結果をすり合わせ検証して、統合的な考察結果を導き出した。

4. 研究成果

1) 『慕帰絵』と『最須敬重絵詞』(詞書と「指図書」)の検討(担当: 全員)

覚如の没後、きわめて近い時期に相次いで制作された『慕帰絵』と『最須敬重絵詞』の比較検討をおこない、両絵巻が覚如の事跡の中から何時の、何を選択し描いているのかを把握した。言うまでもなく、詞と絵は、往々にしてずれる。詞が伝える事跡の中から、どこをピックアップし、どのように描くのかについても十分に注意を払う必要がある。

この結果、『慕帰絵』(26段)と『最須敬重絵詞』(28段)に描かれる覚如の人生は、以下の3期に大別できる。

：聖道門の師につき、有力寺院の貴顕僧侶に寵愛されながら励んだ修学時代の事績。

：父・覚恵(1239-1307)の住む東山・大谷への帰参(正応5・1292)以降の事跡。

正和2年(1313)の留守職引退後の事跡

ただし、各期の出来事・事跡を扱う段の分量は相違し、先行研究では『慕帰絵』が 期に5巻3段～10巻の13段15場面を割き、和歌に関する事跡を多く取り上げる点が注目されてきた。しかし本研究で注目したのは、 期の分量の差と、両絵巻の詞と絵の関係性である。『慕帰絵』において 期、大谷へ帰参後の事跡を描くのは4巻2段・5巻1段・5巻2段の3段のみであるのに対し、『最須敬重絵詞』は18～24段の7段・9場面と多く、 期の事跡を具体的に見ると、『最須敬重絵詞』では覚如が東山周辺の多様な寺に住まう僧ら、親鸞の弟子筋、そして血縁の人々と交わる。また父・覚恵が同席する場、覚恵の往生も描くなど、『慕帰絵』との相違が明確である。

さらに両絵巻は、分量の差にとどまらず、同じ事績や場を扱っても、詞と絵(『最須敬重絵詞』は「指図書」から判断)の内容が相違する。『慕帰絵』の描写で注目されるのは、第一に大谷房の建物の屋根の描写が、覚如が引退する以前の 期では檜皮葺、それ以降の 期は板葺に変る点、第二に大谷房の表門を一貫して檜皮葺の平唐門で描く点である。『慕帰絵』では、親鸞廟を一度も描かないが、本来廟堂の入口に当たる唐門を、大谷房全体の表門として描くことで、廟所を暗示したといえる。

2) 『慕帰絵』5巻1段・2段における「大谷」の表象(担当: 池田・小沢)

真宗史における覚如の時代、とりわけ13世紀末から14世紀初頭にかけては、門弟の力を得て構えた京都東山・大谷の親鸞廟を預かる留守職と、その土地の所有をめぐり、覚如と父・覚恵の異父弟・唯善(覚如にとっては叔父)との争いが深刻化した。一族内の内紛や南北朝の戦乱によって、破却や焼失を被った大谷房は、初期本願寺にとってきわめて重要な場であった。また、留守職の継承や本願寺の存続には、本所である比叡山延暦寺の院家の承認、さらには東山大谷周辺の宗教環境が重要な意味を持っていた。このような背景を踏まえて、覚如没後の初期本願寺をとりまく状況を背景に制作された『慕帰絵』の空間と人物描写を分析し、大谷房の人々が周囲に見せたかった「自画像」を読み解いた。中でも、修業を終えた覚如が大谷での活動を本格的に始める5巻1・2段に注目して、東山大谷の「場」とそれをめぐる「人」の描写を検討した。

5巻1段は覚如と同居する唯善との争論を題材とする。絵は、画面中央の唐門を挟んで、左右に2つの建物を描き、文永9年(1272)に親鸞廟堂建設のため小野宮禅念が提供した「北殿」と、永仁4年(1296)に覚恵が買い足した「南殿」の、活券状から判明する位置関係と合致する。唐門が「北殿」側にある点は、「北殿」こそ親鸞の廟所であり、「南殿」は後の拡張であるという成立をよく示す。内部には、覚如と唯善が別畳ではなく平行に敷詰めた畳の上に坐し、遣戸や唐紙と合わせて問答の場を内向きの空間として描くことで、日常的な両者の交わりを示したと考えられる。

5巻2段は「親鸞伝絵」制作の逸話を題材とし、絵は覚如が絵師を指揮して絵巻を制作する大谷房内だけではなく、門前の風景を広く描く。その描写は、大谷房が面する七観音大道と今小路の交差や、周辺に位置する門跡の候人の坊舎、密教・禅宗・専修念仏等の寺院が集積する宗教空間を、門前の建物と往来の人々により詳細に表現しており、「大谷」の重要性を視覚的に強調する。加えて、『慕帰絵』が、特定の人物の面貌や着衣の描写に細やかな意を払う点も注目される。すなわち初期本願寺に関わる人々を、従来指摘されてきた血脈を伝える宗主らにとどまらず、対立が知られる一族、血縁の日野家、他寺の僧や門弟らの人々をも描き分けることで、覚如没後の大谷の自画像を創出したと判断できる。

(2019年3月24日、美術史学会東支部例会にて「『慕帰絵』における「大谷」の表象 初期本願寺をとりまく人と宗教空間」と題し研究発表をおこなった。)

3) 『慕帰絵』5巻3段にみる覚如の「隠棲」の場(担当: 小沢)

『慕帰絵』5巻3段は、覚如が和歌に親しみ、正和4年(1315)に『閑窓集』を著した逸話を扱う。留守職引退後の 期の最初の場面に当たるが、詞書では隠居を明記せず、「林山の幽閑をのみたのしみ」等の文で暗示するのみで、画中の和歌会の場所も明記しない。

覚如の隠棲は、『存覚一期記』に「窪坊」に借住とあり、谷下一夢がこれを一条大宮近辺の窪寺と推定した。平安京の一条北辺は、主殿寮北畠や宮内省内膳寮の菜園だったが、10世紀末に五辻通近辺から邸地化、13世紀末には一部に在家が存在し、寺院化も進んだが、残る土地は妻

畑や果樹園を継承した。

5巻3段は、紙面の半分を屋敷外の往来に充て、人が行き交い、馬が暴れる姿を描く。道沿いの水路は奥ほど深く、傾斜地であることが表現され、秋冬の場面だが畠に青物(麦)を描くなど、一条北辺の実像が投影される。また、屋敷の門は潜門で、正規の門ではありえず、別に表門があること、他人の屋敷内の「借住」であることを暗示する。厨や塗籠の存在も合わせ、和歌会の場を私的空間として描く点も、文芸の場の当時のあり方とよく合致する。

この5巻3段は、前段の5巻2段と画面上の塀や門、馬や覚如の位置関係が極めて近似し、室内と往来を「静」と「動」で対比する表現も共通する。両者の都市空間を詳細かつ正確に描写することで、大谷から「隠遁」の場への転換を表現したと考えられる。

4)「第二代留守職・覚恵の表現」について(担当:村松)

『慕帰絵』の翌年に著わされた『最須敬重絵詞』は、従来から『慕帰絵』の補遺作と言われているが、具体的に何を増補(あるいは改変)したのかについては、十分な検討がなされていない。本論はその一端を明らかにすべく、両絵巻に共通の登場人物、覚如の実父覚恵(1239~1307)に注目し、その位置付けに大きな差異があることを指摘した。結論から言えば、『慕帰絵』での覚恵は存在感が異様に希薄で、いつの間にかすがたを消しているのに対し、『最須敬重絵詞』および『指図書』では、全28段中11段に覚恵が登場する。さらに『慕帰絵』にはない覚恵往生(6巻23段)、没後の法要(同24段)など、父子の関係を強調する段が増補されていることを指摘した。

その意図は、ひとつには覚恵の子である覚如こそ次の留守職に相応しい人物であるとアピールする意義、もうひとつは覚恵の存在を介して、彼の出自である日野家との血縁を明確にする思惑があったと推測している。今後も様々な角度から分析していきたい。

また、両絵巻に関与したと目される覚如子息の存覚は、観応2年(1351)すなわち覚如の没年に「父祖両所御影」を絵師円寂に発注し、それぞれに画讃を記したという(『存覚一期記』存覚62歳条。覚如像は現存し西本願寺蔵)。これにより存覚は、両絵巻制作とほぼ同じ頃、覚恵を覚如と相並ぶ存在に仕立てる意図があったことが知られ、本論の傍証となる記事として注目される。

5)「和歌を詠む聖俗の人々とその空間 - 北野社と覚如僧坊の歌会場面を中心に - 」(担当:赤澤)

本研究では、覚如が歌を詠む空間がどのような場であり、歌会の場を表現することで、慕帰絵は何を表現したのかを検討した。

5巻3段の覚如歌会場面では、国文学分野の先行研究を整理し、「伊勢新名所絵歌合」等との比較から、慕帰絵の歌会は遊宴性が削ぎ落とされた、閉鎖的な文芸研鑽の場として表現されており、歌会のしつらいや作法は、室町期の作法書とも通じることを論じた。車座に座る聖俗の人々は、他の段にも登場する、覚如・従覚・光葉丸・日野家の人々と比定できる。

6巻1段の北野天満宮法楽和歌会は、古来より和歌三神として崇敬された、春の盛りの北野社の拝殿に座る覚如を描く。他の北野社を描いた曼荼羅や屏風との比較から、慕帰絵は北野社境内の要素を詳細に表現している。北野社の拝殿は、「甲乙人ゆかさる在所」であり、拝殿における法楽和歌は、室町將軍や天皇などの限られた人物が使用する場であった。『最須敬重絵詞』の当該段との比較から、慕帰絵には、北野社の拝殿に座る覚如・従覚・光葉丸・日野家の人々が克明に表現されている。慕帰絵の歌会場面は、覚如とその一族の歌人としての暮らしぶり、京における文化的活動の様子を詳細に示そうとするもの判断する。

6)「覚如の歌枕訪問の表現について」(担当:中村)

『慕帰絵』10巻のうちには、覚如が色々な縁から松島(6巻3段)、和歌浦(7巻1段)・天橋立(9巻1段)というそれぞれの景勝地を訪問する逸話が収録されている。これらはいずれも『最須敬重絵詞』には収録されず、『慕帰絵』の中では覚如の後半生にあたる後半巻の逸話であるが、天橋立以外は具体的な訪問時期を意図的に明らかにしないような態度が、詞書にうかがわれる。また、これら三景に共通する絵画表現上の共通点としては、「松」が景観上の主要要素で、特徴的なその生え方が、大きな魅力として受け止められた場所だということであろう。三景は古代からの歌枕であり、『慕帰絵』も、訪問譚の中で覚如の詠歌をそれぞれ紹介している。

このような点に基づいて、『慕帰絵』における「松景」描写に着目した。各段の描写を検討すると、「覚如が実際に訪問した」ということのリアリティを補強するために、例えば松島では頼賢碑を雄島に描きこんでいたり、天橋立では成相寺から橋立明神、対岸の串戸までを見渡す広い視野をもとにした構図を取っている。一方で、詞書の内容に応じて実際より距離を短縮したり、特に後補である和歌浦では覚如訪問時よりも後補時点での和歌浦のイメージ(堂社がなく、海辺に松のみが繁る)に基づいた描写がなされている。つまり訪問時の実景を忠実に再現することが優先されたわけではないことがうかがえる。三景の描写目的は明確な「名勝」のイメージを提示することであり、その景勝そのものを詠った「歌」の方を鑑賞者に印象付けるためのものと判断した。

7)「『慕帰絵』補巻の制作環境について」(担当:藤田)

文明14年(1482)制作の『慕帰絵』補巻を描いた掃部助藤原久信は、『慕帰絵』以外に遺品

や史料が無い不詳の絵師であるが、本発表では、画風の検討からその出自について考察を試みた。泉万里氏により、文明18年(1486)頃制作の「壬生地蔵縁起絵巻」は画風が三種に大別され、そのうちの一種は、久信の画風を継承したものであることが指摘されている。さらに氏は、同絵巻の別の画風には、蓮如の裏書を有する「親鸞絵伝」を数多く手がけた工房の画風の特徴が見られるとする。この指摘を端緒に、久信が「親鸞絵伝」を制作していた工房となんらかの繋がりを有していたのではないかと想定し、管見の限りではあるが、『慕帰絵』補巻とほぼ同時期の制作である、蓮如の裏書を有する「親鸞絵伝」と補巻の画風の比較を試みた。すると、寛正4年(1464)制作の赤野井別院所蔵「親鸞絵伝」が、久信の画風に近似することが判明した。具体的には、アクが強くやや野卑な人物の表情、目の下に隈を入れる表現、横顔の人物は下あごが突き出たように描くなど、特に人物表現において共通する表現が見受けられた。赤野井別院所蔵本が久信工房の前身に当たるのであれば、久信は「親鸞絵伝」など本願寺の画事を請け負っていた絵師である可能性が考えられる。また、それゆえに「壬生地蔵縁起絵巻」において、他の「親鸞絵伝」を制作していた工房と共作がなされたと推測されよう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計13件)

藤田 紗樹、「なよ竹物語絵巻」における図像表現と制作背景についての試論、『美術史』186号、査読有、2019年、345-361頁

赤澤 真理、建築空間の境界と打出の装束 附・宮内庁書陵部蔵「女房装束打出押出事」翻刻 -、『国文学研究資料館紀要文学研究篇』44号、査読無、2018年、93-124頁
DOI:10.24619/00003604

赤澤 真理(ミッコネル ミリアム翻訳)、The Borders of Shindenzukuri "Inside" and "Outside" as Staged by Uchi'ide, Studies in Japanese Literature and Culture Center for Collaborative Research on Pre-Modern Texts, National Institute of Japanese Literature (NIJL), National Institutes for the Humanities, Vol.1、査読無、2018年、pp.39-55
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sjlc01.html>

中村 ひの、称念寺蔵「他阿真教像」について 寿像「筒の御影」序論、『未完成 企図/作品/芸術家』(千葉大学大学院人文公共学府 研究プロジェクト報告書) 333集、査読無、2018年、43-51頁

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/104895/S18817165-333-P043-NAK.pdf>

藤田 紗樹、メトロポリタン美術館所蔵「秋夜長物語絵巻」の基礎的考察、『未完成 企図/作品/芸術家』(千葉大学大学院人文公共学府 研究プロジェクト報告書) 333集、査読無、2018年、52-64頁

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/104896/S18817165-333-P052-FUJ.pdf>

池田 忍、「うたたね草紙」が映す時代の現実(リアル) 描かれた石山寺と紫式部信仰(歴史の証人 写真による収蔵品紹介)、『歴博』、査読無、vol.200、2017年、20-23頁

<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/200/witness.html>

中村 ひの、研究ノート「遊行上人縁起絵」伝本系統の再考に向けて 遠山記念館本及び常称寺本の調査から、『テキストと引用 原典, 異本, 翻案』(千葉大学大学院人文社会科学部研究プロジェクト報告書) 321集、査読無、2017年、60-70頁

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/103149/S18817165-321-P060-NAK.pdf>

藤田 紗樹、「なよ竹物語絵巻」と似絵の関係をめぐる考察、『人文社会科学部研究』(千葉大学人文社会科学部研究科) 34号、査読無、2017年、25-44頁

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/102556/S18834744-34-T025-FUJ.pdf>

藤田 紗樹、「芦引絵」の基礎的分析 錯簡の訂正を中心に、『テキストと引用 原典, 異本, 翻案』(千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書) 321集、査読無、2017年、71-83頁

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/103150/S18817165-321-P071-FUJ.pdf>

亀井 若菜、「New Approaches to Twelfth-century Japanese Picture Scrolls: Transgression of Gender Norms in the Miraculous Origins of Mt. Shigi」、Reexamining Japanese Society and Culture: Four Case Studies, Research Presentations by RIJS Visiting Scholars、2016年、pp.327-331

亀井若菜・細馬宏通対談、『粉河寺縁起絵巻』を読み解く(亀井若菜『語りだす絵巻 「粉河寺縁起絵巻」「信貴山縁起絵巻」「掃墨物語絵巻」論』2015年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞記念)、『人間文化』(滋賀県立大学人間文化学部研究報告) 41号、査読無、2016年、38-44頁

http://www.usp.ac.jp/user/filer_public/31/4c/314c0a03-9fd2-4af7-8bd1-75918b322b61/bunka_41_2016.pdf

[学会発表](計5件)

池田 忍・小澤 朝江、『慕帰絵』における「大谷」の表象 初期本願寺をとりまく人と宗教空間、美術史学会東支部例会、2018年

藤田 紗樹、“A Preliminary Study of the Aki no Yononaga monogatari emaki ”、日本美術史に関する国際大学院生会議(JAWS2017) (国際学会)、2017年

〔図書〕(計 3件)

赤澤 真理、平凡社、『御簾の下からこぼれ出る装束 王朝物語絵と女性の空間 ブックレット書物をひらく19』、2019年、全120頁

赤澤 真理(メリッサ マコーミック翻訳)、Shinden Architecture and The Tale of Genji.、John T. Carpenter, Melissa McCormick,他3名、The Tale of Genji: A Japanese Classic illuminated.、The Metropolitan Museum of Art, distributed by Yale University Press.、2019年、全368頁(pp.327-331)

池田 忍、青弓社、山崎明子・藤木直実編『<妊婦>アート論 孕む身体を奪取する』(担当箇所「日本美術に描かれた妊婦 中世の仏教思想と産む身体へのまなざし」、2018年、全152頁(118-131頁))

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：亀井 若菜

ローマ字氏名：(MAMEI, wakana)

所属研究機関名：滋賀県立大学

部局名：人間文化学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30276050

研究分担者氏名：村松 加奈子

ローマ字氏名：(MURAMATSU, kanako)

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：龍谷ミュージアム

職名：講師

研究者番号(8桁)：40707973

研究分担者氏名：赤澤 真理

ローマ字氏名：(AKAZAWA, mari)

所属研究機関名：岩手県立大学盛岡短期大学部

部局名：生活学科生活デザイン専攻

職名：講師

研究者番号(8桁)：60509032

研究分担者氏名：小澤 朝江

ローマ字氏名：(OZAWA, asae)

所属研究機関名：東海大学

部局名：工学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70212587

(2)研究協力者

研究協力者氏名：藤田 紗樹

ローマ字氏名：(FUJITA, saki)

研究協力者氏名：中村 ひの

ローマ字氏名：(NAKAMURA, hino)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。